

# 国内では普及せず

傾斜回転床炉とは、どんな焼却炉なのか。設計図などによると、おわん形の炉が回転し、ごみをかき混ぜながら燃やす仕組み。しかし、中部地方のある産廃業者は

「国内では普及しておらず、民間でも使われていないのは全国で数カ所程度のはず。理由は構造的な問題があるからだといわれている」と語る。

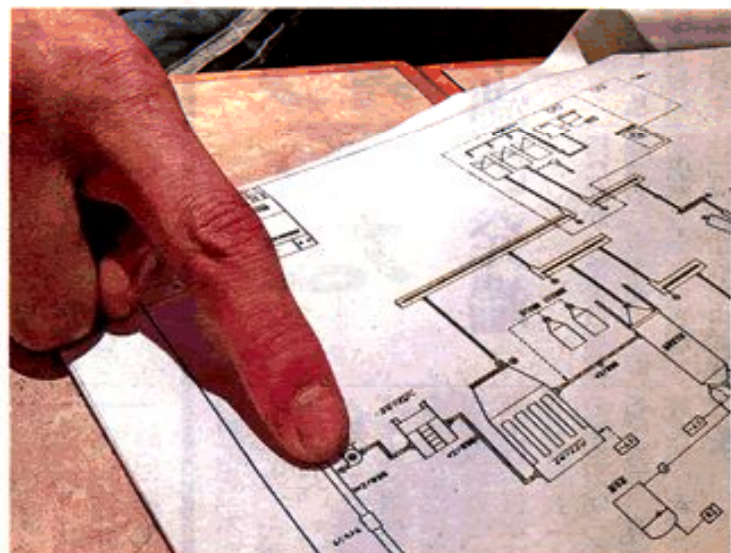
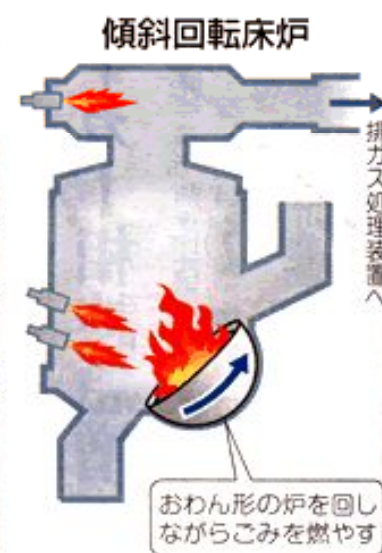
「うまく燃やすための調節作業が難しい。ごみがうまく混ざらないと、炉の底にたまったごみが、上部にかぶさったごみにふたをされる形になり不完全燃焼しやすい」

焼却施設ではしばしば問題となるダイオキシンの生成を抑えるには「1800度の高温で2秒以上の焼却」が必要とされているが、不完全燃焼だと発生の危険性が高まる。

さらに別の業者も「重油を焼却する炉として使う例は知っているが、落ち葉や稲わらを焼くなんて初耳だ」と言う。

環境省は「(焼却施設建設工事を受注した)日立造船が選んだ炉で安全だと聞いている」とし、

# 環境アセス不要の小型



わけではないと説明。その日立造船は取材に「攪拌により燃焼が促進される」「回転数提出した届け出書では、

対し、「攪拌により燃焼が促進される」「回転数提出した届け出書では、によりごみと空気との接触面積を増やして燃焼を制御することによって燃焼温度を上げて燃焼を制御可能」などの特

徴を挙げ、「さまざまな付するなど、そのずさん

### 焼却施設建設の経緯

2012年春	環境省が鮫川村に事業概要を説明
6月	鮫川村議全員(12人)が建設計画を了承
8~9月	環境省が建設業者を公募
10月中旬	鮫川村広報誌に施設建設の「お知らせ」
11月15日	環境省が福島県の焼却施設建設についての条例などに基づく審査が終わる前に着工
12月5日	審査未終了が発覚し、工事を中断
中旬	審査が終わり工事を再開
25日	鮫川村で一般住民に対して初の説明会を開催

「本来なら排気筒の出口に放射線物質濃度の常時監視装置がないといけない」と焼却炉の図面を指さす古川さん

「百九十九」。環境省が公募した際に、処理能力を「二百・未満」と指定したためだが、これは何を意味するのか。

「実は焼却能力が二百・未満だと、『産業廃棄物処理法』と『大気汚染防止法』の規制がからなくなる。その結果、事前に大気や土壌、地下水などへの影響を調べる環境評価(アセスメント)を実施しなくても建設できるのだ。ある産廃業者は『まるきり規制逃れとしか思えない』と話す。

加えて、炉には放射性物質監視装置は設置されず、建屋もない。放射性物質の測定は、公道からの出入り口にモニタリングポストがあるだけ。万

時間当たりの焼却能力が

# 不完全燃焼ならダイオキシン

が、施設で事故としても緊急に対応とは思えない構造だ。焼却灰について、省は焼却施設付近に保管するといふ。それから、北茨城市場では約千頭の肉牛を飼育する山本徹さん。「実際は最終処分場をつもりではないか。川村を先例に、環境省がいろいろな小型炉地につくり、市町が管理させる気ではない」とその真意をいふ。産廃物問題が専門の環境運動家関口鉄夫は「放射性廃棄物を焼却すれば、大気中に拡散する。他のごみと混ぜて却して放射性物質の量を薄める」という考えに現実性が欠けると指摘している。

## デスクメモ

環境相の石原は自民党幹事長時福島第一原発をサティアンと生じた。サティアンのオウム真理教の施設である。自動やサリンを密造したが、強制捜査手帳は謎だった。環境省「サティアン」では